

理学療法士・作業療法士による退院後早期の再調整の実態把握とその軽減を目指したツール開発と試行

著者	土屋 瑠見子
学位授与年月日	2017-03-23
URL	http://doi.org/10.15083/00076009

[課程・2]

審査の結果の要旨

氏名 土屋 瑠見子

本研究では、理学療法士・作業療法士（PT/OT）による「病院で退院調整が行われたものの、退院後早期に再度環境調整が必要な状態（以下、「退院後早期の再調整」とする）」を減らすための介入策を検討するための3つの研究を行った。具体的には、研究Ⅰとして訪問PT/OTに対するインタビュー調査により、退院後早期の再調整が実施された理由を明らかにした。それと同時に研究Ⅱでは、郵送質問紙調査によって退院後早期の再調整の実施頻度と、訪問PT/OTの認識を明らかにした。さらに研究Ⅰ、研究Ⅱの結果を踏まえ、研究Ⅲでは退院後早期の再調整を減らすために病院PT/OTが退院調整時に用いるツールを開発し、ツールを使用した病院PT/OTと患者を対象とした事例研究によって、退院調整内容の変化を明らかにした。その結果、以下のことが明らかになった。

1. 退院後早期の再調整が実施された理由は、転倒受傷のリスクがある、介護者の負担が大きい、退院後生活に対する患者の意向が表出された、の3つに分類された。
2. 退院後早期の再調整は訪問リハビリテーションサービス利用者の3割に実施されていた。
3. 訪問PT/OTの認識としては、退院後早期の再調整を減らせると思うと回答した者は48.3%、減らせるとあまり思わないと回答した者は37.5%であった。
4. 入院中から退院後生活に対する患者の意向を聴取し退院調整へ反映させるためのツールを開発し、試行した結果、病院PT/OTの意識を患者にとって重要な特定の生活活動・動作に向け、患者の意向を踏まえた退院調整につながっていた。

以上、本論文では、退院後早期の再調整は多くの利用者で行われており、対策が必要であること、またその対策として患者の意向の把握を退院調整に反映する重要性を示した。また、それらを踏まえた具体的な介入策を開発・試行し、退院調整内容に患者の意向がより踏まえられる可能性を示した。

本結果は、今回開発したツールを使用することが、患者の意向を踏まえた退院調整内容へ変化する可能性を示唆する重要な知見であった。本研究はこれまで介入策がなかったPT/OTによる退院調整に用いることができる具体的な介入策を提示したという点で重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。